

○ 平 岩 學 洋
世を侘びて山に骸を潜めつゝ歌の世夢む人は瘦せたり

○ 中 西 斐 蔭
變り行く雲の形を眺めてはうつし此世を泣く夕べかな

○ 尾 上 政 子
朝窓に近うも匂ふ白蓮の露美しくしき鐘の響や

○ 眞 未
夏瀆の夕べ眞砂路さまよへば波涼しうも月さし昇る

○ 田 邊 孝
夕雲や初夏かざる野の錯と花なき里を寒う流るゝ
菩提樹に斧をかざせば山鳥のぼろく啼きぬ朝明の森

○ 林 靜 子
物思ひ窓の月に寄る夏夕べ音なくちりぬ紅のけし
瘦せし頬に笑みをつくりて慰めん母君もなし啼く子規

○ 伊 藤 天 郎
暗の夜を神が呪ひの聲のごと身に泌み渡る水のせいらぎ
讀みさし、伊勢を枕に畫むせば又好き夢の胸にも入らなむ

○ 順 禮 子
順禮に身の上話しきく夜なり怪しう更けぬ山子規
花ならば白あざみこそよからむと夕野逍遙ふ我頼は瘦せぬ

○ 中 村 鶴 聲
塵の世をかこつ子茲に來たらすや胸さながらに清し白瀧

うすもの、秋にふれてそと搖るゝ白百合くしき匂ひにこめたる。
* * * * *
うらぶれて小島に舟す繪師と我が浮世語りにははくれにけり
灯とりて大星小星したゝかに酔ひもしぬらむ七夕の宵
* * * * *

無聊吟社句集

水底の苔まで見ゆる清水かな 天 外
枝蛙夕吹く風の雨近き 同
松風の余りをそよぐ青田かな 文 久
藻の花や明日咲く花は水の底 同
今人の呑だ跡あり苔清水 同
飛で来て袖に隠るゝ壁かな 同
山伏の山を下るや蚊喰鳥 同
花桐や茶畑つゞき寺の裏 同
活花は遠州流や夏座敷 同
蚤も居ぬ絹の蒲團や京旅宿 同
掛香や老いたる妻の憂き思ひ 同
よき水を得て歸りけり百合の花 同
朝風や君を見送る夏衣 同
小さき手に持ちきれぬ程の覆盆子かな 同
兩岸の芽の茂りや行々子 同
醉 月

晒井の人ならびたる夕餉かな
 美しき籠に入れたる林檎かな
 出干や孫に物言ふ鑑匱
 炎天や寺に葬儀の人だまり
 行水の垣のぞきけり白き肌
 裏戸から人の入り来る蚊遣かな
 青芒は馬に喰はれぬ百合の花
 日盛や藍を干したる門蓮
 石段や花袖こぼるゝ朝の雨
 有明の草に夕沙やねらひがり
 鯛や釣瓶の音を前後して
 巖頭に狂女の立てり夏の海
 京人形子の抱たまゝ晝寐かな
 冷夢に胡蘆かへたる團扇かな
 寄りかゝる二階柱や絹團扇
 頼り立つ搦風呂の下や漣團扇
 爪切て庭に捨てたる團扇かな
 腎べたを裸のたゝく團扇かな
 水草に追はれてすがる螢かな
 雲の峯崩れて雨となる夜かな
 まだ雪の重みは知らず今年竹
 飴賣や團扇投出す男の子
 襪に脇差さして漣團扇

同 樂 水
 同 同
 同 雪 舟
 同 閑 人
 同 さだ 女
 同 白 醉 樓
 同 同
 同 紫 耶
 同 同
 同 同
 同 同
 同 曉 霞
 同 同
 同 奇 零
 同 同

口多き大工の妻や漣團扇 同
 道出て、團扇を探る夜頃かな 同
 噓して顔かくしけり絹うちば 同

黒子と笑顔

左の一篇は時事新報附録文藝週報に松旭齋天勝の談話なりとして記載されたるものなり。西洋の藝人どもが如何に其化粧法に巧みなるかを知ることを得可く且面白き節もあれば茲に轉載すること、せり。

私は十二歳の時から舞臺へ出まして手品は遣つて居りました。始めの内は少しも極りの悪いと云ふ事は御座いませんでした。十五六になつてからは、少しは舞臺で口上を云ひます様になつて、其口上を云ふのが極りが悪う御座いました、夫れから始めて外國へ參つた時には、種々失錯が御座いましたが第一に白粉の塗り方が悪いと云つて笑はれたので、御座いますと申すのは、私は日本流に白粉をコテ〜に塗つて、口へ紅を濃くさして舞臺へ出ましますのです。すると、日本の婦人はお化粧の様な顔だとか、死んだ人の様だと、云はれました、それで、一座を仕て居る胡蝶の舞ひを遣る西洋婦人に、化粧を仕て貰ひまして、